

【原 著】

全国学力テストの調査結果における県間比較（2）

尾島 卓

A Comparison between Prefectures of Result of National Achievement Test in Japan II

Taku OJIMA

2017

岡山大学教師教育開発センター紀要 第7号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.7, March 2017

全国学力テストの調査結果における県間比較 (2)

尾島 卓*¹

本稿は、2016 (平成 28) 年に文部科学省が実施した「全国学力・学習状況調査」(メインタイトルを含め、以下本稿では、全国学力テストと略記)の結果のうち、テスト受験者の解答した児童質問紙および教員(多くの場合は管理職)が解答した学校質問紙の結果を検討し、学力向上を目指す取組の評価のもととなるデータの整理を主な目的としている。具体的には、10年間の学力調査において結果が常に上位を占める秋田県の結果を、学力向上を中心的な行政課題と位置づけてきた岡山県の結果と比較した。この結果、7年前に拙論で指摘された課題と全国的な分析および教科外の取組といった三つの範疇に属する項目において、二つの県では顕著な違いが見られた。

キーワード: 秋田県、岡山県、全国学力・学習状況調査

* 1 岡山大学大学院教育学研究科

I はじめに 問題意識と分析方法について

学年全員を対象として 43 年ぶりに再会された全国学力テストは昨年 10 年目を迎えた。調査結果発表翌日に第一面トップ記事で結果を報じた山陽新聞では、以下に見だしのような記事が掲載されたⁱ。

(3 面)

学力テスト 10 年 地域格差 教員採用に影
文科省 重い腰上げ対策着手

解説本末転倒顕著 根本見直しを

(12 面)

実施前に過去問で対策

現場「本当の力付かない」

(31 面)

小中正答率 7 市で改善

4 科目合計 都市部中学は苦戦

(32 面)

16 年度全国学テ 目標 10 位以内達成ならず
中学 少ない授業外学習時間

施策の徹底検証を 家庭での協力が不可欠

節目の年であるということ、あるいは岡山県知事の選挙公約の一つであること等の要因から、かなり多角的な報道になっている。また調査開始当初には問題の懸念から行われなかった県内市町村の結果比較を伝えつつも (31 面)、継続調査の意義に疑問を提出する記事 (3 面、12 面) も多く、教育と授業の改善に対する役割については否定的な評価が目立っている。

しかしながら、莫大な経費を投下し継続された調査結果はやはり教育実践の改善に役立てられるべきであるというのが筆書の見解である。このような考え方から、すでに 7 年前の分析では、本調査における主要な目的である活用力を測定する B 問題の得点差に以下の要因が影響している可能性を指摘したⁱⁱ。

児童・生徒質問紙における要因

- ・試験問題に取り組む際の態度
- ・家庭学習における取組
(計画性、苦手教科、復習等を含む)

学校質問紙における要因

- ・学校内での児童、生徒の態度
(挨拶、落ち着き具合等を含む)
- ・家庭学習に対する教職員の共通理解

以下での比較では上記の要因における改善状況を扱うと同時に、次期学習指導要領における実践改革の課題に関わる質問項目も俯瞰し結果の整理を行う。なお、報道の通り、国語および算数・数学の学力調査問題の得点における比較する二つの県の差には年度経過による大きな変化はないため、本論では児童・生徒質問紙調査および学校質問紙の結果のみを扱う。

結果整理を行う第一の段階として本論末にある資料 1 の示したように、上述した二つの調査のポイント差の傾向を概観したⁱⁱⁱ。ここで抽出された、児童生徒質問調査の結果ではポイント差が 10%以上の項目と学校調査では 20%以上差以上の項目について詳述していく^{iv}。その際、とりわけ学校質問紙調査の

結果の説明では、20%以下のポイント差があらわれた質問項目にも言及していきたい。このような手続きをとるのも、概観した限りではあるが、中学校の調査結果の差異がきわめて大きかったからである。

1 児童・生徒の家庭学習に関する項目の差
児童生徒質問紙調査の結果、家庭学習時間の項目において両県では以下のような差が見られた。

II 以前の整理で差異が見られたデータの傾向

表 1-1 平日の家庭学習時間（小学校）

（14）学校の授業時間以外に、普段（月～金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間も含む）

	1	2	3	4	5	6
岡山県（a）%	8.3	16.1	44.2	22.8	6.4	2.1
秋田県（b）%	3.6	11.3	57.2	24.6	2.4	0.8
b-a（ポイント差）	-4.7	-4.8	13.0	1.8	-4.0	-1.3

注）表中の解答選択肢内訳

- 1：3時間以上、2：2時間以上、3時間より少ない、3：1時間以上、2時間より少ない
- 4：30分以上、1時間より少ない、5：30分より少ない、6：全くしない

表 1-2 平日の家庭学習時間（中学校 質問（14））

	1	2	3	4	5	6
岡山県（a）%	5.0	17.2	35.0	22.3	12.8	7.5
秋田県（b）%	5.1	24.7	51.6	15.3	2.7	0.6
b-a（ポイント差）	0.1	7.5	16.6	-7.0	-10.1	-6.9

注）表中の解答選択肢内訳：表 1-1 と同じ

表 1-3 休日の家庭学習時間（小学校）

（15）土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間も含む）

	1	2	3	4	5	6
岡山県（a）%	5.1	5.0	12.4	33.8	34.7	8.9
秋田県（b）%	2.7	6.0	22.0	54.3	13.9	1.2
b-a（ポイント差）	-2.4	1.0	9.6	20.5	-20.8	-7.7

注）表中の解答選択肢内訳

- 1：4時間以上、2：3時間以上、4時間より少ない、3：2時間以上、3時間より少ない
- 4：1時間以上、2時間より少ない、5：1時間より少ない、6：全くしない

表 1-4 休日の家庭学習時間（中学校）

	1	2	3	4	5	6
岡山県（a）%	4.3	8.0	17.9	28.3	26.8	14.6
秋田県（b）%	5.2	18.0	41.2	28.6	6.1	0.8
b-a（ポイント差）	0.9	10.0	23.3	0.3	-20.7	-13.8

注）表中の解答選択肢内訳：表 1-3 と同じ

国学力テストの調査結果における県間比較（2）

2009年（平成21）度の調査結果と比較すると、平日の学習時間には大きな差異は見いだせない^v。しかし休日の学習時間においては、小中学校とも「1時間より少ない」と解答した児童生徒のポイント差が拡大している。全体的により長く学習する児童生徒が増加している秋田県とは対照的な傾向である。また、休日「まったく」学習しない中学校生徒が岡山県では一割以上存在するのも特徴的である。

次に家庭学習の取組の質的特徴について概観する。

表 2-1 家庭における計画的な学習（小学校）

（21）家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか

	1	2	3	4
岡山県 (a) %	28.8	35.9	27.2	8.0
秋田県 (b) %	42.1	38.3	16.6	3.0
b-a (P 差)	13.3	2.4	-10.6	-5.0

注) 表中の解答選択肢内訳

- 1：している、2：どちらかといえば、している
3：あまりしていない、4：全くしていない

表 2-2 家庭における計画的な学習（中学校 問21）

	1	2	3	4
岡山県 (a) %	17.3	30.8	35.2	16.6
秋田県 (b) %	26.2	41.0	27.1	5.7
b-a (P 差)	8.9	10.2	-8.1	-10.9

注) 上記解答選択肢：表 2-1 と同じ

表 2-3 家庭学習における復習の取組（小学校）

（24）家で、学校の授業の復習をしていますか

	1	2	3	4
岡山県 (a) %	24.6	33.3	29.9	12.1
秋田県 (b) %	65.5	25.5	7.4	1.6
b-a (P 差)	40.9	-7.8	-22.5	-10.5

注) 上記解答選択肢：表 2-1 と同じ

表 2-4 家庭学習における復習の取組（中学校 問24）

	1	2	3	4
岡山県 (a) %	13.2	28.0	34.5	23.9
秋田県 (b) %	53.0	34.5	10.2	2.1
b-a (P 差)	39.8	6.5	-24.3	-21.8

注) 上記解答選択肢：表 2-1 と同じ

計画的な取組の解答傾向では、2009年度調査との特筆すべき差はなかった^{vi}。また復習の取組では、秋田県では小中学校ともに取組の推進が読み取れるが、岡山県においては復習に取り組まない生徒はわずかにしか減少していない。この結果として復習を含んだ計画的な家庭学習を意識的に「している」（取組

んでいる）児童生徒の占める割合に大きな差が生じたと考えられる。

2 学校質問紙調査の結果に関する項目

2009年度の比較において取り上げた、秩序だった授業・学校環境及び教師と子ども間の信頼関係の高さを問う項目のうち、とりわけ中学校で顕著な差があらわれたものが、「調査対象学年の生徒は、礼儀正しいと思いますか」であった^{vii}。

表 3-1 授業外の児童の様子（中学校）

（16）調査対象学年の生徒は、礼儀正しいと思いますか

	1	2	3	4
岡山県 (a) %	28.5	57.0	14.6	0.0
秋田県 (b) %	66.1	33.0	0.9	0.0
b-a (P 差)	37.6	-24.0	-13.7	0.0

注) 上記表中の選択肢

- 1：そのとおりだと思う、2：どちらかといえば、そう思う、3：どちらかといえば、そう思わない、4：そう思わない

上の問（16）に類似した学校の雰囲気や問う質問項目である問（14）「調査対象学年の児童は、熱意をもって勉強していると思いますか」と（15）「調査対象学年の児童は、授業中の私語が少なく、落ち着いていると思いますか」の解答結果では、小学校の場合には秋田県と岡山県の間には顕著なちがいは見うけられない。他方、中学校の調査結果では、回答選択肢1の「そのとおりだと思う」と回答した生徒の割合が秋田では多かった（ポイント差 問（14）=22.1 / 問（15）=20.6）。

また、以前の筆者の作業で顕著な差を指摘した、家庭学習の取組に関する調査項目のうち「教職員の共通理解」に関する質問項目は、2016年度の調査では同様な傾向を示した^{viii}。家庭学習の取組に関する質問項目では、しかしながら以下の表に示すような差が見られた。

表 3-2 家庭学習時の具体的指示（中学校）

（97）調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、家庭学習の取組として、生徒に家庭での学習方法を具体例を挙げながら教えるようにしましたか（国語／数学共通）

	1	2	3	4
岡山県 (a) %	25.9	60.1	13.3	0.0
秋田県 (b) %	53.0	42.6	4.3	0.0
b-a (P 差)	27.1	-17.5	-9.0	0.0

注) 上記表中の選択肢

1 : よく行った、2 : どちらかといえば、よく行った、3 : あまり行っていない、4 : 全く行っていない

表 3-3 国語科の家庭学習に対する教師の意識 (中学校)

(90) 調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、国語の指導として、家庭学習の課題 (宿題) を与えましたか

	1	2	3	4
岡山県 (a) %	85.4	13.3	1.3	0.0
秋田県 (b) %	36.5	47.8	14.8	0.9
b-a (P 差)	-48.9	34.5	13.5	0.9

注) 上記表中の選択肢 : 表 3-2 と同じ

家庭学習に対する教師の意識は数学でも同様な傾向を示している。秋田県の教師の多くは、宿題と家庭学習を同一視することなく生徒に課しているようだ。この構えが家庭における生徒の自主的学習から直接導きだされるものではないとしても、授業における学習の家庭における振り返りが習慣化・一般化されていることが、県の差異に暗示されているのだろう。

Ⅲ 全国的な結果分析との比較

1 児童生徒の言語活動に関連する項目

調査をもとに国立教育政策研究所が作成する『平成 28 年度学力・学習状況調査報告書 質問紙調査』(以下、『報告書』と略記)では児童生徒質問紙調査の結果と教科調査とのクロス集計が行われている。そこでは「教科の平均正答率が高い傾向」にある児童生徒は以下囲みの質問項目に「当てはまる」と多く回答する学校の生徒である指摘されている。なお、囲み一段目にある質問項目をくくる枠組みは、上の報告書に掲載されている範疇である⁵⁾。

主体的・対話的な深い学びの視点による学習指導の改善の取組状況

(46) 「総合的な学習の時間」では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか

(47) 5年生までに受けた授業では、先生から示される課題や、学級やグループの中で、自分た

ちで立てた課題に対して、自ら考え、自分から取り組んでいたと思いますか

(48) 5年生までに受けた授業では、自分の考えを発表する機会が与えられていたと思いますか

(49) 5年生までに受けた授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていたと思いますか

(50) 5年生までに受けた授業では、学級やグループの中で自分たちで課題を立てて、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して、発表するなどの学習活動に取り組んでいたと思いますか

(51) 5年生までに受けた授業で、学級の友達との間で話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、自分の考えをしっかりと伝えていたと思いますか

(52) 5年生までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していたと思いますか

(58) 学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しいと思いますか

(59) 学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか

(66) 国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしていますか

(67) 国語の授業で意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫していますか

(68) 国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気を付けて書いていますか

この全国的傾向は当然、本論で扱っている比較にも現れている。以下では、そのうち両県の比較で顕著であった項目として小中学校ともに差が大きかったものを提示する。

表 4-1 「総合的な学習の時間」の学習活動 (小学校)

(46) 「総合的な学習の時間」では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか

国学力テストの調査結果における県間比較（2）

	1	2	3	4
岡山県 (a) %	23.6	39.1	28.0	8.9
秋田県 (b) %	40.1	43.3	13.7	2.7
b-a (P 差)	16.5	4.2	-14.3	-6.2

注) 上記表中の選択肢

1 : 当てはまる、2 : どちらかといえば、当てはまる、3 : どちらかといえば、当てはまらない、4 : 当てはまらない

表 4-2「総合的な学習の時間」の学習活動(問 46 中学校)

	1	2	3	4
岡山県 (a) %	20.5	37.2	29.7	12.4
秋田県 (b) %	39.4	45.6	12.4	2.5
b-a (P 差)	18.9	8.4	-17.3	-9.9

注) 上記表中の選択肢 : 表 4-1 と同じ

また中学校のみではあるが、岡山県と秋田県とのポイント差が 20%以上あった項目の傾向は、以下の表のような状況であった。

表 4-3 授業における話し合い活動(中学校)

(49) 1、2年生のときに受けた授業では、生徒の間で話し合う活動をよく行っていたと思いますか

	1	2	3	4
岡山県 (a) %	37.9	40.3	17.0	4.7
秋田県 (b) %	58.3	34.6	6.0	1.0
b-a (P 差)	20.4	-5.7	-11.0	-3.7

注) 上記表中の選択肢 : 表 4-1 と同じ

総合的な学習における学習活動に対する回答をみると、岡山県では学校段階をおう毎に意欲や積極性の低い児童生徒が増加している。また授業における発表や発言への取組では、秋田県では 90%以上の生徒が活動に対して自覚的であるのに対して、岡山県の生徒の 20%が参加していないか、それを認識していない状況にある。

2 教職員の学習改善に関連する項目

『報告書』では学校質問紙調査の結果と児童生徒の学力とのクロス集計も行われている。以下囲みの質問項目に「当てはまる」と回答する学校の生徒は「教科の平均正答率が高い傾向」と指摘されている。なお質問項目をくくる枠組みは、上の報告書に掲載されている範疇を利用している[※]。

主体的・対話的な深い学びの視点による学習指導の改善の取組状況
(17) 調査対象学年の生徒は、学級やグループ

での話し合いなどの活動で、自分の考えを相手にしっかりと伝えることができていると思いますか

(18) 調査対象学年の生徒は、学級やグループでの話し合いなどの活動で、相手の考えを最後まで聞くことができていると思いますか

(19) 調査対象学年の生徒は、学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか

(20) 調査対象学年の生徒は、自らが設定する課題や教員から設定される課題を理解して授業に取り組むことができていると思いますか

(21) 調査対象学年の生徒は、授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思いますか

(35) 調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫をしましたか

(39) 調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしましたか

(40) 調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、発言や活動の時間を確保して授業を進めましたか

(42) 調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、学級やグループで話し合う活動を授業などで行いましたか

(43) 調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、総合的な学習の時間において、課題の設定からまとめ・表現に至る探究の過程を意識した指導をしましたか

(44) 調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、授業において、生徒自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を取り入れましたか

(45) 調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、本やインターネットなどを使った資料の調べ方が身に付くよう指導しましたか

(46) 調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、資料を使って発表ができるよう指導しましたか

(47) 調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、自分で調べたことや考えたことを分かりやすく文章に書かせる指導をしましたか

(96) 調査対象学年の生徒に対して、前年度ま

でに、家庭学習の取組として、調べたり文章を書いたりしてくる宿題を与えましたか（国語／数学共通）

注：項目注の「生徒」は小学校質問紙では「児童」に読み替え。また質問（96）は小学校調査では質問（98）。

表の質問項目のうちポイント差が20%以上あった質問項目は4つだった。以下に列挙したい。

表 5-1 話し合い活動における生徒の話し方（中学校）

（17）調査対象学年の生徒は、学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを相手にしっかりと伝えることができていると思いますか

	1	2	3	4
岡山県 (a) %	11.4	57.0	31.0	0.6
秋田県 (b) %	12.2	79.1	8.7	0.0
b-a (P 差)	0.8	22.1	-22.3	-0.6

注) 上記表中の選択肢

1：そのとおりでと思う、2：どちらかといえば、そう思う、3：どちらかといえば、そう思わない、4：そう思わない

表 5-2 話し合による思考の深化・拡大（小学校）

（19）調査対象学年の児童は、学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか

	1	2	3	4
岡山県 (a) %	5.1	57.1	36.2	1.3
秋田県 (b) %	13.9	72.8	13.4	0.0
b-a (P 差)	8.8	15.7	-22.8	-1.3

注) 上記表中の選択肢：表 5-1 と同じ

表 5-3 話し合による思考の深化・拡大（中学校）

（19）調査対象学年の生徒は、学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか

	1	2	3	4
岡山県 (a) %	10.1	58.9	30.4	0.6
秋田県 (b) %	12.2	78.3	8.7	0.9
b-a (P 差)	2.1	19.4	-21.7	0.3

注) 上記表中の選択肢：表 5-1 と同じ

表 5-4 発表の際の資料等の工夫（中学校）

（21）調査対象学年の生徒は、授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思いますか

	1	2	3	4
岡山県 (a) %	5.1	48.7	43.0	3.2
秋田県 (b) %	5.2	71.3	22.6	0.9
b-a (P 差)	0.1	22.6	-20.4	-2.3

注) 上記表中の選択肢：表 5-1 と同じ

表 5-5 発表の際の資料等の工夫（中学校）

（42）調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、学級やグループで話し合う活動を授業などで行いましたか

	1	2	3	4
岡山県 (a) %	43.7	50.0	6.3	0.0
秋田県 (b) %	72.2	26.1	1.7	0.0
b-a (P 差)	28.5	-23.9	-4.6	0.0

注) 上記表中の選択肢：表 5-1 と同じ

新聞報道によれば全国41位だった中学校の取組を問う項目で両県の差は顕著になった。それにも関わらず、またポイント差20%以下の質問項目を捨象していることもあり、明確な差異のある項目は少ない印象を受ける。このことは、岡山県において学力向上策として導入されている「岡山型授業スタンダード」が、ある程度、学校ぐるみの授業改善に活用されていることを物語っている。なぜなら、授業につながる家庭学習でもって家庭との協力関係を構築しながら、授業の「導入－展開－終末」ごとの分節でこなすべき活動－展開では例えば説明や説得などの話し合いが明示されているからである。

なお「主体的・対話的など深い学びの視点による学習指導の改善の取組状況」の質問項目の結果を検討する際には、児童生徒質問紙の調査結果にあらわれる彼ら・彼女らの「受け止め方」と教職員の実践意識との間だの齟齬に注意を払うべきである。『報告書』に示される児童生徒質問紙と学校質問紙とのクロス集計をみる限り²¹、両者の結果には明確な相関がない。授業改善の取り組みもまた、集団対集団で展開される実践であるがゆえの結果だと思われる。

これまで述べてきた「主体的・対話的など深い学びの視点による学習指導の改善の取組状況」と並んで、『報告書』においても学力との相関が指摘され、今回の比較では中学校の調査結果でポイント差が確認された範疇が「カリキュラム・マネジメント」である。まず、この範疇に位置づけられている質問項目のうち『報告書』において教科調査とのクロス分析が施されているものを列挙したい。

カリキュラム・マネージメント	
(28) 指導計画について、知識・技能の活用に重点を置いて作成していますか	
(29) 指導計画について、言語活動に重点を置いて作成していますか	
(31) 教育課程表（全体計画や年間指導計画等）について、各教科等の教育目標や内容の相互関連が分かるように作成していますか	
(33) 生徒の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立していますか	
(38) 調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、各教科等の指導のねらいを明確にした上で、言語活動を適切に位置付けましたか	
(111) 言語活動について、国語科だけではなく、各教科、道徳、総合的な学習の時間及び特別活動を通じて、学校全体として取り組んでいますか	
(112) 学校全体の学力傾向や課題について、全教職員の間で共有していますか	
注：項目注の「生徒」は小学校質問紙では「児童」に読み替え。また質問（83）は小学校調査では質問（84）。質問（85）は小学校調査では質問（86）質問（109）～（111）は小学校調査では（111）～（115）。	

この「カリキュラム・マネージメント」カテゴリのうち中学校調査で 30%以上のポイント差があった項目は以下である。

表 6-1 教科指導における言語活動の位置づけ（中学校）

(38) 調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、各教科等の指導のねらいを明確にした上で、言語活動を適切に位置付けましたか

	1	2	3	4
岡山県(a)%	16.5	70.9	12.7	0.0
秋田県(b)%	47.0	52.2	0.9	0.0
b-a (P差)	30.5	-18.7	-11.8	0.0

注) 上記表中の選択肢

1：よく行った、2：どちらかといえば、行った、3：あまり行っていない、4：全く行っていない

表 6-2 教科指導における言語活動の位置づけ（中学校）

(111) 言語活動について、国語科だけではなく、各教科、道徳、総合的な学習の時間及び特別活動を通じて、学校全体として取り組んでいますか

	1	2	3	4
岡山県(a)%	22.2	61.4	16.5	0.0
秋田県(b)%	56.5	37.4	5.2	0.9
b-a (P差)	34.3	-24.0	-11.3	0.9

注) 上記表中の選択肢

1：よくしている、2：どちらかといえば、している、3：あまりしていない、4：全くしていない

上の問(111)の県間比較では、小学校の調査結果においても 20%以上のポイント差があった。なお、全国的な傾向とは異なり以下の質問項目では顕著な差が認められた。

表 6-3 他の学力調査の参照状況（中学校）

(63) 全国学力・学習状況調査の結果を地方公共団体における独自の学力調査の結果と併せて分析し、具体的な教育指導の改善や指導計画等への反映を行っていますか

	1	2	3	4
岡山県(a)%	25.9	68.4	5.1	0.6
秋田県(b)%	59.1	38.3	1.7	0.9
b-a (P差)	33.2	-30.1	-3.4	0.3

注) 上記表中の選択肢

1：よく行っている、2：どちらかといえば、行っている、3：ほとんど行っていない、4：地方公共団体における独自の学力調査を実施していない

また、ポイント差は 30%未満 20%以上ではあったが、問(60)「平成27年度全国学力・学習状況調査の自校の分析結果について、調査対象学年・教科だけではなく、学校全体で教育活動を改善するために活用しましたか」と問(112)「学校全体の学力傾向や課題について、全教職員の間で共有していますか」の中学校調査質問項目において差が明らかになった。

「カリキュラム・マネージメント」に属する質問項目にあらわれた結果は、教科担任制をしく中学校における学力形成の難しさを物語っている。教科を越えて共同する教師の専門性と同時に、養成段階から継続教育にいたるまでの長期的展望のもとで解決策が検討されるべきであろう。

IV 今年度調査におけるポイント差が大きかった他の項目

小中学校ともポイント差の大きな質問項目のうち、これまで言及しなかったもののいくつかを以下で取り上げる。

表 7-1 学級会等における話し合い活動（小学校）

（29）あなたの学級では、学級会などの時間に友達同士で話し合っただけで学級のきまりなどを決めていると思いますか

	1	2	3	4
岡山県 (a) %	37.9	42.0	15.3	4.8
秋田県 (b) %	58.3	33.9	6.5	1.2
b-a (P 差)	20.4	-8.1	-8.8	-3.6

注) 上記表中の選択肢

1：そう思う、2：どちらかといえば、そう思う、3：どちらかといえば、そう思わない、4：そう思わない

表 7-2 学級会等における話し合い活動（中学校 問 29）

	1	2	3	4
岡山県 (a) %	39.8	37.7	15.2	6.8
秋田県 (b) %	57.1	32.5	7.9	2.2
b-a (P 差)	17.3	-5.2	-7.3	-4.6

注) 上記表中の選択肢：表 7-1 と同じ

この質問項目は一昨年からの調査から取り入れられたものである。また前出の『報告書』では学力調査と関連づけたデータ整理も行われていない。以下に示すように中学校調査の比較では、この教科外活動に関連する項目において注目すべき違いがあった。

表 7-3 教科外話し合いにおける合意形成（中学校）

（19）学級会などの話し合いの活動で、自分とは異なる意見や少数意見のよさを生かしたり、折り合いをつけたりして話し合い、意見をまとめていますか

	1	2	3	4
岡山県 (a) %	18.5	38.4	29.3	13.7
秋田県 (b) %	31.9	46.0	17.8	4.3
b-a (P 差)	13.4	7.6	-11.5	-9.4

注) 上記表中の選択肢：表 7-1 と同じ

学級会と並んで時間割上「学校教育課程」を構成する「総合的な学習の時間」についても興味深い結果が出ている。

表 7-4 「総合的な学習の時間」の手応え（小学校）

（45）「総合的な学習の時間」の授業で学習したことは、普段の生活や社会に出たときに役に立つと思

いますか

	1	2	3	4
岡山県 (a) %	44.1	40.2	11.9	3.4
秋田県 (b) %	58.0	34.0	6.4	1.4
b-a (P 差)	13.9	-6.2	-5.5	-2.0

注) 上記表中の選択肢：表 7-1 と同じ

表 7-5 「総合的な学習の時間」の手応え（中学校：問 45）

	1	2	3	4
岡山県 (a) %	20.5	37.2	29.7	12.4
秋田県 (b) %	39.4	45.6	12.4	2.5
b-a (P 差)	18.9	8.4	-17.3	-9.9

注) 上記表中の選択肢：表 7-1 と同じ

上の総合的な学習の時間も、教科学習以外の話し合い活動と同様に近年に加えられた観点である。戦後の授業研究運動では、いずれの実践も人格形成に対する効果や学校改革の潜在能力を検討されてきた。PISA 型学力の形成に対して、これら 20 世紀からの実践遺産が有効であるかを判断するためにも継続的なデータ収集がのぞまれる。ⁱ

V むすび

以上、秋田県と岡山県の今年度の全国学力テストで実施された児童生徒質問紙調査と学校調査の結果を比較してきた。紙幅の都合上、ポイント差が大きいものここで扱うことができなかった項目が若干ではあるが存在する。残された項目も含め継続調査が期待される項目の整理分析は次の機会に譲りたい。

なお、今年度の『報告書』では調査結果の統計学的分析が推奨されていたことが印象に残る。本論で述べた両県の比較も重回帰分析等を駆使し更に綿密に分析することも可能であろう。このような手法の実践改革可能性も今後、検討されるべきであろう。

<注>

i 山陽新聞（2016 年 9 月 30 日付け朝刊）より見だしを抜粋した。

ii 尾島卓「全国学力テストの調査結果における県間比較（1）」岡山大学教師教育開発センター刊『岡山大学教師教育開発センター紀要』第 2 巻、2012 年、196-205 頁。

iii 以下、本論では文部科学省・国立教育政策研究所共同開催「平成 28 年度 学力・学習状況調査」で収集され同研究所のホームページ

(<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/zenkokugakuryoku.html>:2017 年 1 月 3 日閲覧) において公開された『平成 28 年度 学力・学習状況調査報告書 質問紙調査』および同質問紙のデータを元に整理分析作業を行った。

国学力テストの調査結果における県間比較（2）

- iv 論文中の集計表では、ポイント 20 以上の数値に編みかけを施している
- v 尾島、前掲著、201 頁参照
- vi 同上 201 頁参照
- vii 同上 201 頁参照
- viii 同上 204 頁参照
- ix 国立教育政策研究所『平成 28 年度学力・学習状況調査報告書 質問紙調査』2016 年、8 頁より抜粋
- x 同上、13 頁より抜粋
- xi 同上、18-22 頁参照

<資料 1>

児童生徒質問紙調査において秋田県のポイントが高い項目

凡例：20%以上+=アンダーライン/20%未満 15%以上+=イタリック/15%未満 10%以上=飾り無し

		質問番号	
1	全国学力・学習状況調査 10 年目の経年変化の把握	小学校調査	(44)、
		中学校調査	(44)、
2	主体的・対話的で深い学びの視点による学習指導の改善の取組状況	小学校調査	<i>(46)</i> 、(47)、(48)、(49)、(50)、(59) (66)、(68)
		中学校調査	<i>(46)</i> 、(47)、(48)、 <u>(49)</u> 、(50)、(51)、 <u>(66)</u> 、(67)、(68)
3	学習評価の在り方	小学校調査	<i>(33)</i> 、
		中学校調査	(33)、
4	ユニバーサルデザイン、規範意識、道徳の時間	小学校調査	(34)、(56)、
		中学校調査	(31)、 <i>(56)</i>
5	学習に対する関心・意欲・態度（国語）	小学校調査	
		中学校調査	(70)、
6	学習に対する関心・意欲・態度（算数・数学）	小学校調査	(76)
		中学校調査	(81)
7	学習に対する関心・意欲・態度（総合的な学習の時間）	小学校調査	(45)、
		中学校調査	<i>(45)</i>
8	学習状況（言語活動）	小学校調査	
		中学校調査	
9	学習状況（指導状況）	小学校調査	(53)、 <i>(54)</i>
		中学校調査	(53)、(54)、(55)
10	学習時間等	小学校調査	(14)、 <i>(14)</i> 、 <u>(15)</u> 、 <u>(16)</u> 、(21)、 <i>(21)</i> 、 <u>(24)</u>
		中学校調査	<i>(14)</i> 、 <u>(15)</u> 、 <u>(16)</u> 、 <u>(24)</u> 、(21)
11	学校生活等	小学校調査	(29)
		中学校調査	<i>(29)</i> 、(30)
12	基本的生活習慣	小学校調査	(13)、
		中学校調査	
13	家庭でのコミュニケーション等	小学校調査	
		中学校調査	
14	社会に対する興味・関心	小学校調査	
		中学校調査	

表注：同じ問題番号は同一質問において複数選択肢が該当することを示す

学校質問紙調査において秋田県のポイントが高い項目

凡例：30%以上+=アンダーライン/30%未満 20%以上+=飾り無し

		質問番号
1	主体的・対話的で深い学びの視点による学習指導の改善の取組状況	小学校調査
		中学校調査 (17)、(21)、(42)
2	学習評価の在り方	小学校調査
		中学校調査
3	カリキュラム・マネジメント	小学校調査 (111)、(113)、
		中学校調査 (38)、(60)、(63)、(100)、(111)、(112)
4	教職員の資質能力の向上	小学校調査
		中学校調査 (103)、(104)
5	小中連携	小学校調査
		中学校調査
6	ユニバーサルデザイン、規範意識、道徳の時間	小学校調査 (48)、
		中学校調査 (14)、(15)、(16)
7	指導方法	小学校調査
		中学校調査 (37)、(52)
8	学力向上に向けた取組	小学校調査
		中学校調査
9	国語科の指導法	小学校調査
		中学校調査
10	算数・数学科の指導法	小学校調査
		中学校調査
11	個に応じた指導（習熟度別少人数指導）	小学校調査
		中学校調査
12	個に応じた指導（ティーム・ティーチング）	小学校調査 (66)
		中学校調査
13	コンピュータなどを活用した教育	小学校調査 (57)、(58)
		中学校調査 (57)、(58)
14	家庭学習	小学校調査
		中学校調査 (90)、(97)
15	教職員の取組	小学校調査 (116)
		中学校調査 (114)
16	地域の人材・施設の活用	小学校調査 (88)
		中学校調査
17	全国学力・学習状況調査等の活用	小学校調査
		中学校調査 (59)
18	就学支援	小学校調査
		中学校調査

表注：同じ問題番号は同一質問において複数選択肢が該当することを示す

A Comparison between Prefectures of Result of National Achievement Test in Japan II

Taku OJIMA*1

Key Word

Okayama Prefecture National Assessment of Academic Ability、 Akita Prefecture

*1 Division of School Education、 Graduate School of Education、 Okayama University